

教職の専門性と教職専門実習の課題

小松 茂

(京都教育大学)

【本研究科の特色】

本研究科は定員 60 名中、学部新卒院生の占める割合が 8 割を超えるという特徴を持っている。そのため教職大学院に求められる「専門性の高度化」を考える場合、「プラス 2 年」で学部卒新採者とは区別される〈より高度な〉専門性を保証することが最重要課題となる。換言すれば、どのような学びを組織化すれば学部 4 年の学びにより高度なプラス・アルファ加えることができるのかという課題である。このことについて論じる中で、教職大学院での効果的な実習のあり方について考えてみたい。

【「教職の専門性」をどうとらえるべきか】

第一の論点は、高度化すべき「教職の専門性」のとらえ方である。教員養成の修士レベル化の根拠として、今日の教育ニーズの多様化、教育内容の高度化への対応があげられ、情報教育、英語教育、特別支援教育等々様々な教育課題に対応できる〈多様な力量〉を備えることが今日における教員の専門性であるかの如く論じる向きがある。しかし、教職に固有の専門性を〈多様な力量〉へと還元する考えは私には疑問である。現場感覚から言うと、教師は日常生起する様々な事象の中に〈当事者〉として在って、自己の直面している事象の文脈を読みながらその都度最適な指導を考え実践することを否応なく求められる。そのような状況に対応できる力量は、多くの知識や多様な特技を持っていることとはかなり違った極めて表現しにくい力であるが、「優れた教師」と目される人には共通して見られる力量である。例えば、保護者対応という場面一つとってみても、優れた教師の場面对応にははっきりとその能力を窺うことができる。

【専門性はどのように育まれるのか】

私は、教職に固有の専門性を〈多様な力量〉よりも〈熟達性〉に重きを置く立場から考えている。ただし、「だから、教師は現場で育てるしかない」という経験主義的な主張にも全面的には同意しない。なぜなら、今日の大変困難な教育現場に新任教師を放り込むだけでは彼らの専門性の向上は望むべくもないからであり、現に新任 1 年目の教員の離職率の高さがその難しさを象徴している。

では、教職大学院での 2 年の間に何ができるのかというのが第二の論点である。本日のフォーラムの副題にも示されているように、教職大学院での学びの核となる理念は「理論と実践の往還」である。先ずこの理念を、研究を主たる生業とする従来の大学院や学部教育との決定的な差異としてとらえ、カリキュラムレベルだけではなく実際の学修の中において具現化していく必要がある。詳述する余裕がないので、以下にそのポイントを列挙する。

① 教職専門実習における「経験的学び」をベースに置いた授業を構想すること

学校現場で院生が体験する（であろう）様々な〈疑問〉や〈気づき〉を基にした内容をコンテンツとして盛り込む。

② 授業の手法を課題探求型、開発型とすること

院生が実習の中で見いだした課題を焦点化し、その解決策について事例研究、アクションリサーチ等の手法を用いて協同的・継続的に追求させる。

③ 個人指導、ゼミにおける個別指導の重視

院生は修了後自立して教壇に立つことを目指すのであるから、学びの深化に伴い個々の院生が抱える課題への個別の対応がますます必要になる。学びが〈本物〉となるためには、本人の自覚と実感を伴った〈考え方・振舞い方〉へと昇華させなければならない。目指すのは〈自己省察力を備えた教師〉である。

【教職大学院での学びにおける実習の位置付け】

このように考えてくると、「理論と実践の往還」における実習の意義が明らかになる。その端緒は「気づきの場、課題発見の場」であり、次に「実践の省察の場」となり、最後に「(自分なりの) 課題解決の場」という意義を併せ持つ。本研究科における現在の実習は「教員としての仕事を実際に体験し、教員になるための自己の課題を見出す場」としての性格が強い。可能であればそれに「研究・探求の場」としての性格をもう少し加えたいというのが私の考えである。

しかし、そのためには実習する院生の力量、大学としての指導のあり方、受け入れる学校現場の条件整備等クリアせねばならない課題が多い。本日はこれからの討論の中で様々なご意見を伺いながら、改善の方途を考えてみたい。